

読んで面白かった話のベスト2を以下引用。

・天皇陛下に献上したい柿

あるとき、ベテラン議員のY先生が、地元の村から難題を持ち込まれた。オラが村で作っている名産の柿をなんとか天皇陛下に献上したいというのだ。当節流行の村おこしというやつである。

これといった名所、名産のないこの村には、たった一つだけ昔から伝えられてきた自慢の柿があった。この柿は赤ん坊の頭ほどもある巨大なもので、大きなわりには味も悪くない。いまは一部の農家が細々と作っているだけだが、この柿の栽培を奨励して大々的に売り出せば、いい村おこしになるじゃないかということになったのだ。

ただし、残念ながら柿の名前が全国的に知られていない。そこで、誰がいいだしたのか、天皇陛下に献上したらどうかというアイデアが出たらしい。なるほど、天皇陛下に食べていただければ、これはもう全国区間違いなしだ。

そこで、とりあえずY先生宅に柿が送りつけられた。村長さんの心づもりは、数少ないなかからとくに立派なものを十個より抜いて詰めた小さな一箱が天皇陛下に食べていただく分。普通の柿を詰めた大きな箱が十箱、これが先生へのお礼。

さて、柿を送りつけられたY先生、村長さんに「よし、わかった。まかせておけ」と、胸を張った方がいいが、いったいどうやって天皇陛下に献上したらいいものかさっぱりわからない。さりとしてほかの政治家に「何かいい知恵はないか」などと恥づかしくて聞けない。

で、山と積まれた柿の箱を前にハタと考えこんでしまった。すると、秘書を務めている息子さん、私の知り合いのベテラン秘書、U氏のことを思い出し、

「Uさんに聞いてみたらどうだろう。あの人なら知恵を出してくれるんじゃないの」

「よし、それなら一つお前が行って聞いてこい」

ついでに手みやげ代わりに送ってきた柿を持っていけ、ということになったらしいのだが、箱の中身をよくわかっていなかったY先生、息子に小さい箱のほうを持たせた。大きな箱のほうに、当然、大きな柿も入っていると思いこんでしまったのである。

こうしてY先生の息子は、たった一箱しかない貴重な柿を、そうとは知らずにぶらさげて、U氏の家にノコノコやってきた。そして、「実は相談があるんです。あっ、その前にこいつはつまらないものですが……」

といいながら柿の箱を差し出した。

U氏は「こりやどうも、そんなに気を遣わないでよ」といいつつ、受け取った柿の箱を奥さんに渡し、応接間で彼の相談を聞いていると、台所のほうで、

「うわー、大きな柿だわ」

と彼女が感嘆の声を上げながら、いまもらったばかりの柿に包丁をいれはじめた。その瞬間、彼の顔色はサーッと変わり、あわてて台所へ駆け込んだ。

「すみません、ちょっと待ってください。それから電話を貸してください」

あわてて電話に飛びつくと、自宅にいるY先生に電話をいれて、

「ちょっと柿の箱、全部、開けてみて。……どう、ばかですか？ みんな小さい？……え？ お手玉ぐらい？ それじゃ、普通の柿じゃないか。ソフトボールより大きいような柿はないの？……え、ありやうや、それじゃ、これが陛下に献上する柿じゃないか……もうほかにはないって……そんなこといったってもう包丁いれちゃったよ……」

もう親子ともどもしどろもどろなのが、実況中継を聞いているようにU氏の耳に入ってくる。しばらくして電話を切って戻ってきたY先生の息子は、

「弱ったな、どうしよう……。なにせこの柿はあんまりとれないから貴重品らしいんです……」

「どうしようといったって、これが陛下に献上するやつなんだろう。それなら持って帰れ、冗談じゃない」

「でもねえ、もう切っちゃったから。困ったな……」

「そんなこといったってこっちの知ったこつちゃないよ。どうするんだよ、この柿。持って帰るのか。それなら持って帰っていいよ」

「いやあ弱ったなあ……」

息子は、進退きわまった様子である。

「あんたも政治家の息子だろう。いずれ親父さんの跡を継がなくちゃならない立場だ。そういう人が、この柿を持って帰るかここで食っちゃうか、そのぐらいのことが決断できないでどうするの。そんなんじゃ、お話にならないよ」

「うーん、わかりました。食べちゃいましょう」

結局、天皇陛下に献上するために地元の人たちが持ってきた柿をU氏夫妻とY先生の息子の三人で食べてしまった。

いや、その柿はうまかったらしい。なにしろ、選び抜かれた柿ですからね。もっと息子のほうは、味も何もほとんどわからなかったらしいですが……。

さて、ここまで読まれた読者は、ひょっとしてU氏のことを「なんて不敬な野郎なんだ!」とお思いになるかもしれない。が、実をいえばこの話、天皇への献上品と聞いた時点で、答えは決まっているんです。政治家を通じて、天皇陛下に柿を献上するなんてことは不可能だ、と。

そんなことは最初からわかっていたんだけど、U氏は暇だったし、目の前でドタバタしはじめたから、時間つぶしに面白いやと思って少々からかってみたとか。しかし、あまりいじめるのも可哀相だから献上について説明してやった。

天皇陛下が献上品をお食べになるのには二つのケースがある。一つは陛下が地方に巡幸されたとき、各地で食べられる場合。もう一つは各都道府県の知事が、宮内庁を通じてお届けする場合である。国会議員を通じて献上するなどということは百パーセントありえないのだ。つまり、最初から無理な相談だったのである。

「わかりました。でも、村のほうにはどう説明したらいいでしょうかね？」

「簡単じゃないか。オレの家を宮内庁の職員だということにすればいいんだ。村長さんには、こういえよ。宮内庁に行ってこういう柿ですと見せたら、宮内庁の担当者が剥いて食べちゃった。だけど来年、また柿がなる時期になったら、県知事を介して献上することになるから、そのときに書類上のフォローをしてくれましていけばいいんだよ」

「なるほどね」

「それで村長さんも納得するだろ。あと、なんかいつてたか？」

「いや、柿を献上したら、それから三越とか高島屋で売りたいといってるんですよ。一個千円ぐらいで売れるんじゃないかって」

「それはずっと簡単だよ。まかしてくださいと胸を叩いたらいい」

「だって置いてくれなかったら、どうするんですか」

「バカ、デパートっていうのは、棚に余裕があったらたとえ一個でも置いてくれるんだ。デパートは売れたら金が入るし、売れなかったら売れなかったで返品するんだから、損するわけじゃない。それぐらいはY先生からいえばどうにでもなるだろう」

案の定、この柿は次の年から八百円ぐらいで都内のデパートで売られたらしい。なんでも、なかなかの売れ行きだったそうだ。しかし、献上の話はY先生のところへは二度とこなかったとか。結局、この件でいちばん得をしたのは相談を受けたU氏だった。

それにしても、この話は地元から陳情を受けたら「ノー」といえず、後でバタバタする典型的なパターンである。なんでもかんでも、すぐに「OK」と胸を叩いてしまうが何もできず、結局、後援者との関係がまずくなってしまうというのは、よくある話だ。

難しい陳情を受けてしまった場合に大事なのは、決して議員にまで上げず、秘書の段階で止めてしまうことだ。そして、思いのほかうまく処理できれば議員のお陰、うまくいかなかった場合は秘書に能力がなくてダメだったということにするのである。そうすれば、陳情がうまくいなくて後援者が怒ってしまっても、議員とのパイプがぶつとりと切れてしまうことはない。「悪いのはあの秘書の野郎だ」ということで丸くおさまる次第である。

・名門小学校入学のクジ

この章の締めくくりに、一つ陳情がらみで私のズッコケ話をいたしましょう。

前に裏口入学の世話だけは絶対にしないといいましたが、実は一度だけ入学にかかわったことがあるんです。もちろん裏口じゃない。某有名附属小学校に入るためのくじ引きだ。依頼者の女性は私にこういつてきたのである。

「あなたは秘書として、アカの他人を選挙に当選させた実績があるワ。あなたの人生は、とても運がいいのよ。私は生まれつき運がないからダメ。私の娘の人生はあなたの強運にまかせます。ぜひ私の代わりに小学校に行って、クジを引いてきてちょうだい。あっ、別に外れてもいいのよ。ダメもとんだから」

猛烈にまくしたてられて、ついに断わりきれなかった……。

そして当日、「とりあえず結果がわかったら、すぐに電話を入れてちょうだい」といわれた私は、「電話まで入れるのか、イヤだなあ」と思いながら、渋々、小学校に向かった。

そして、イザ会場に着いてみたらこれがすごい。小学校の講堂には千人単位の人が集まっているのである。このなかで合格できるのは、わずか数十名。くじ引きの方法は、ガラガラガラッと回転する箱を回して玉をポチョンと出すヤツだ。ほら、商店街の福引きなんかでよくやっているでしょう。

合格は赤玉で不合格は白玉。当然ながら出てくるのは白ばかり。最初のうちは白、白、白……と続き、ようやく何十人目かで赤が出ると、講堂はみんな「おお〜っ」とどよめき、続いて「おめでとう」の意味を込めた拍手をする。

ところが、ガラガラが何百人も進み、赤玉が三つ、四つと出てくると、だんだんこの拍手がまばらになっていく。親たちはみんな張りつめた表情でシーンとしていて、まるで霊安室にでもいるような気分だ。

そのなかで、ただガラガラガラという音だけが大きく響く。もう会場にいる全員、祈るような気持ちで、遠くのガラガラを見つめ、「白、白、白、白出ろ、白」と、無言の叫びを発している。なにせこの倍率だ。一つでも赤が出ると、その分だけ自分が赤を引く確率が低くなる。ところが、ほかの人がガラガラ回しているのを見てみると、なんだか赤がポロリと出てきそうな気がしてしまうのである。たまに赤が出て大喜びしている親を見ると、殺してやりたくなってくる。

しまいには誰も拍手なんかしなくなってしまった。そして講堂じゅうに「自分だけは受かりたい」という気迫だか呪いだか祈念だか知らないが、わけのわからないものが充満して、もう恐ろしい雰囲気である。

これには、滅多なことでは動じない私もまいった。遠くのガラガラにじっと目をこらしているうちに、だんだん目も痛くなるし、頭まで痛くなってくる。自分の順番が近づいてくると、ドキドキしてくるわ、喉は渴くわ、手には大汗と、もう昇天する一步手前みたいなものだ。

ガラガラを回すスピードなんて、実際にはなんの関係もない。が、ポチョンと赤が出ると、あのときに回した速さはどのくらいだろう、前に出たヤツは、どのくらいの速さで回していたかなと、頭の中で走馬灯のようにグルグルと、前に赤玉が出たシーンが思い出されてくる。

そしてついに私の番が回ってきたが、イザ、ガラガラの前に立ってみると回すスピードもへったくれもない。頭が真っ白になって無我夢中で回すと結果は白の不合格。

こうなると次のイヤな仕事が残っている。「落っこちました」と電話をしなくちゃならない。ところが小学校の外の公衆電話はどこもみんな「合格だ」「不合格だ」と連絡する人でふさがっている。しかたなく駅まで歩いていったが、そこもいっぱい。あれだけ大勢の人がいっせいに「落っこちた」と、家族に連絡しているのだから無理もない。

結局、電車に乗って、二駅先まで行ってそこから電話した。ところが、相手は落ちたらすぐに電話があるはずだと思っていたが、なかなか電話がかかってこないで、「こりゃ合格だ」と思ってしまつたらしい。驚いたことに、家じゅうで祝杯をあげていたのである。その最中に電話をかけたものだから、奥さんの怒ること、怒ること。

「落ちてるのに、なんでこんな時間にかけてくるの」

「いや、電話機が全部ふさがっていたもんですから。すいません」

「嘘いつてるんでしょ。あなた、いつもジョークばかりいうから」

「すいません、本当に白だったんです」

「ホントは赤だったんでしょ」

「本当にすみませんが、ダメだったんです」

「あなた、私を馬鹿にしてるのね。だましてるんでしょっ！！」

「すいません、残念ながら本当に不合格です」

この電話以来、ここの家とはつきあいがいい。それまでは、食事に招待されたり、一緒に旅行をしたりと親戚づきあいだったんですがね。もうとんだ難儀です。

「しよせん針の穴に象を通すみたいなことで、無理なんだから。落ちても気にしないでいい」といった人が、気にしないどころか怒り狂っている。しかも、まるで私が全部悪い実たいなことをいうのである。

さしもの私も、こんなことはこりごり。もう二度と人様の代わりにクジなんて引きたくありませんな。